

# ティーチング・ポートフォリオ

大学名： 湘南医療大学保健医療学部

所 属： 保健医療学部

名 前： 内藤 亜由美

作成日： 2024 年 9 月 30 日

## 1. 教育の責任

私は、2024年4月に湘南医療大学保健医療学部臨床看護学領域に着任した内藤 亜由美（教授）である。大学における教員経験は4年目である。前職では、成人・老年看護学領域に所属し、老年看護学を担当し、老年看護学概論、老年期看護論、老年看護実践論、成人・老年看護実践論、在宅看護論の講義演習を担当していた。自習では、看護過程の展開実習、老年看護学実習Ⅰ、老年看護学実習Ⅱ、成人看護学実習（終末期）、看護学統合実習を担当した。また、老年看護学ゼミで卒業研究指導、就職支援、国家試験対策を担当した。大学院においては、高度実践看護コースで治療のためのNP実践演習を担当した。

本学では、30年以上の臨床経験（超急性期、慢性期、在宅など）、特定認定看護師としてのチーム医療の経験を活かし、臨床看護学領域で表1に示す科目を担当し、科学的根拠に基づいた看護を实践し、地域・社会に貢献できる人材養成を行っている。

表1 2024年度担当科目

---

ナーシングプロセスⅡ
ナーシングスキルⅡ
ヘルスアセスメントⅢ
成人看護学
リハビリテーション看護論
在宅看護方法論（演習）
プロフェッショナル論Ⅰ
慢性期看護学実習
看護学統合実習
看護研究Ⅱ

---

## 2. 私の理念・目的

### 1) 私の理念

私の看護の理念は、2つある。一つは「生きた看護」を实践することである。生きた看護とは、提供する看護により、たとえ病や障害をもっていようとクライアントやクライアントを取り巻く人々が、その人らしく生き生きと生活できるように Well-being を支えることを目的とする看護であり、そのプロセスの中で看護を提供する側も生きがいを感じることが出来る看護である。二つ目は、臨床のニーズや疑問（クリニカルクエスト）を研究課題（リサーチクエスト）に吟味し、臨床研究活動を継続することである。大学教員の役割

には、①専門分野の研究、②学生への教育、③大学の管理・運営がある。この3つの中で、専門分野の研究は意識的に取り組まなければ日々の教育活動や大学運営の業務に流されてしまう恐れがある。常に疑問をもち、「こうなったらもっとケアよくなる」という探求心を持ち続けていくこと、研究を通して地域医療とのつながりを持ち続けることを大切にしていきたい。

## 2) 理念をもつに至った背景

「生きた看護の実践」、「臨床研究の継続」という私の理念をもつに至った背景は、私のこれまでの皮膚排泄ケア特定認定看護師としての経験と、大学院での学びとこれまでの研究活動がある。

私は、1990年に看護師免許を取得し29年間を超急性期病院、2年間を地域医療、直近3年間は大学教員をしながら看護外来で勤務してきた。その中で、看護師11年目に皮膚排泄ケア認定看護師の資格を取得した。病院内の組織を横断的に活動し、ストーマケア、創傷ケア、フットケアを提供する看護外来を開設し、小児から高齢者と年齢を問わず、外来-病棟-退院調整-在宅と時期を問わず、救命救急センター、一般病棟、外来と場所を問わず、あらゆる急性創傷・慢性創傷や排泄に問題のあるクライアントの実践、相談、教育活動を行ってきた。その間、わが国は超高齢社会を迎え、医療政策にも変化を余儀なくされ、在院日数の短縮化、医師の診療科や都市部への偏在化、医療安全の課題などから医療崩壊の危機が提唱される時期を経験した。地域医療構想では、在院日数の短縮化と医療機関の役割分担の明確化が進み、医療依存度の高い患者であっても、急性期病院から回復期病院、療養型病院、在宅医療へ移行しなければならなくなった。そこで、わが国では2016年度から看護師特定行為研修制度を制定し、医師の業務のタスクシフトが行われるようになった。私は、看護師特定行為研修の先駆けとなった厚生労働省の試行事業から参画してきた。そして、制度化初年度に研修を修了し、試行事業から数えると約15年間看護師特定行為研修に関わってきた。認定看護師として特定行為の実践を行うことは、まさにインターディシプリナリアプローチによるチーム医療であり、以前よりも患者や周囲の医療者とのきずなが深まった。これらの経験が「生きた看護の実践」に至った背景である。

次に、「臨床研究の継続」は、私の看護師人生に大きな影響を与えた恩師や大学院の仲間による影響が大きい。私は、老年看護学／創傷看護学分野における臨床・研究活動を世界に発信し高い評価を得てきた研究室で大学院生活を送る機会に恵まれた。ひとつの研究成果が、一日に数えきれないほど多くの療養者、医療者によい結果をもたらすことを目の前で経験することができた。よりよい看護を提供するための臨床に根差した研究に取り組み続け、研究活動のプ

ロセスの中で臨床とのつながりを構築していきたいと考える。

### 3. 教育の方法・戦略

教育の方法として、①解剖・生理に基づいたメカニズムを理解する、②ケアの根拠を理解する、③体験学習を取り入れる、④医療現場での応用、実際の医療現場では何がおこっているのかを理解することを目指し、テキストに書かれていることを基本としつつ、学生が将来実習や臨床現場で考える基礎づくりを行っている。

#### ① 解剖・生理に基づいたメカニズムの理解

表面から見えない体内のメカニズムを、わかりやすいシエーマ、動画などを用いて解説する。インターネットやスマートフォンの普及とともに育ち、デジタルネイティブ世代の学生には、文字だけでは要点が伝わりにくいため文字を読むことが苦手な学生にも理解ができるように資料作成に工夫をする。

(成人看護学、リハビリテーション看護論)

#### ② ケアの根拠を理解する

ケアの手順や方法だけではなく、なぜそのように行うのか、関連する研究結果を提示しながら科学的根拠を教授する。

(リハビリテーション看護論、看護研究Ⅱ)

#### ③ 体験学習を取り入れる

グループ学習、体験学習(ストーマ装具の貼付経験、体圧分散寝具の体験、体圧測定)などを取り入れ、知識だけでなく実際に体験や計測を行うことで、知識の定着・確認・創造をめざす。

(リハビリテーション看護論、ナーシングスキルⅡ)

#### ④ 医療現場での応用、実際の医療現場で何が起きているのかを理解する

知識の定着、応用につながる事例を提示し、暗記ではなく「自分自身ならばどのように実践するか」を統合して考えられるように促す。

(成人看護学、リハビリテーション看護論)

上記を展開するために、教育の戦略として、最新の機器などを用いたアセスメント技術の習得する、最新の医療・看護の知見を国外・国外の文献から情報を得る、臨床とのつながりをもつ、の3点を行なう。

### 4. 学習成果

- ・ 成人看護学では、学生より配布資料が非常にわかりやすいという評価を得た
- ・ リハビリテーション看護論では、実際にストーマ装具を学生が自分の腹部に貼付し3日間を過ごす体験学習を行った結果、ストーマとともに生きる患者の理解や患者指導に必要なこと、継続看護の必要性について学生の気づきや理解が得られた

## 5. 改善のための努力

着任初年度のため、今年度は科目責任を担当する科目がないため、今年度は、以下の項目に取り組む。

- ① 教員や領域の理解と領域間のコミュニケーション  
本学の特徴として領域を超えた科目担当があるため、教員の専門性やカリキュラムツリー、カリキュラムマップを理解し、次年度に向けて本学のカリキュラムの長所を活かすシラバスや授業設計を考える。
- ② 本学の教育教材の把握  
山手キャンパス、東戸塚キャンパスで利用できる教材を把握する。
- ③ 新しい看護技術の習得  
エコーによる慢性便秘の評価方法など、学生が卒業後に経験するであろう臨床で行われている新しい看護技術を修得し、学生へ教授できるよう自己研鑽を行う。
- ④ 教務委員会活動・チューター活動  
教務委員会の活動、チューター活動を通して、学生の学修を支援する。

## 6. 今後の目標

### 【長期目標】

カリキュラムを把握し、次年度のシラバス作成、授業設計ができる

### 【短期目標】

- ① 担当するチューターグループ学生の特徴を理解し、個別的な指導ができる（2025年3月まで）
- ② 査読付き論文を2編執筆する（2025年3月まで）
- ③ 新たな臨床研究の倫理審査を完了する（2025年2月まで）

### 【添付資料】

初年度のため添付資料無し